慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ウキリアム・モリスと英国社会主義運動
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.8 (1921. 8) ,p.1202(140)- 1204(142)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210801-0140

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

ウ井リアム・モリスと英國社會主義運動

ウ井リアム・モリスが英國藝術史上並に社會主義史上において特殊の地位を占めてゐると云ふことは誰人も疑問としないところであらう。從つて彼を主題とする書籍が可成に多くあると云ふことも當然のことと云はなくてはならない。今こゝに紹介しやうとするものも數多いモリス研究書の一つである。William Morris and the Early days of the Socialist movement, being Reminiscences of Morris' Work as a propagandist, and observations on his character and Genius, with some account of the Persons and Circumstances of the Early Socialist Agitation togather with a series of Letters addressed by Morris to the Author by I. Bruce Glasier with a Preface by May Morris, 1921. がこれである。Bruce Glasier その人は同じく英國社會主義史上に名を止めてゐる人で、彼は古くから社會主義運動に從ひ、その所屬は獨立勞働黨（その以前はモリスと運動を共にした）にあつて專ら倫理的社會主義を唱道し、社會主義的詩歌を創作し、Keir Hardie, Jamsay McDonald と共に獨立勞働黨を主宰した人で、昨年物故した人である。

この社會主義運動の古武者が嘗てはその指導者であつたモリスに就いて如何なる考を持つてゐるか、又たモリスの人格、學說は如何なるものであつたかは本書を讀むものの容易に觀取し得るところであらう。彼は先づモリスが詩歌の上においては Burns, Wordsworth, Coleridge Byron, Keats, Browning. 繪畫その他の手工的藝術においては Burne-Jones, Philip Webb, Rossetti に優るとも劣らない天才であると共に、彼はその氣質において全然社會主義であることを斷定し、「彼は社會主義者たることなくして、ウキリアム・モリスたることが出來なかつた故に社會主義者であつた」と云つてゐる。（四頁）さうしてその社會主義が極めて溫き味ある友情 fellowship をその基礎としてゐることを發見し、彼もその影響を受けることが多かつたのである。（尙ほ七十八頁を參照のこと）

かくの如くモリスの價値を論斷してから本論に入つてゐる。本論は先づモリスが社會主義への改宗當時における英國社會主義の狀態を略述し、モリスが一八八三年一月十七日 Hyndman の Democratic Federation に加盟した當時のことからのモリスに關することを書いてゐる。彼は如何にして Hyndman 一派の議會主義的社會主義者と別れて、別に Socialist League を造り、この同盟の主義宣傳の事業とその間において著者がモリスとの交遊において得たる彼の印象、その學說等はモリスが講演、談話の記述によつて知ることが出來る。さうして更らに Socialist League の內部における無政府主義者の活動からその瓦解についての Hammer Smith Socialist Society の設立の事情に及でゐる。さうして最後にモリスの社會主義に關する思想を記述してゐる。この間にあつてモリスと社會主義運動の時代を異にした種々な人物は織り込まれてゐる。

けれども人あつて、若し、本書一冊のみを以てモリスに關する全體を明かにしやうとする人があつたならば、その人は恐らく失望するであらう。この書はモリスの生涯の全體を傳へ、モリスの學說の全豹を窺はしめるものではない。他の人についてこの種の著作を求めると、恐らく Wilhelm Liebknecht の「Karl Marxの回想記」は之に相當するものであらう。この書は恐らく最もよく人としての Marx を傳へるものであらう。けれどもそは決して彼の全體ではない（勿論この書は Marx の生涯を簡單に記してはゐるが。）このモリスに關する著述も恰度この Liebknecht の書に當るものである。故にこの書を讀む人は他の著述によつて補足することがなくてはならない。

モリスの生涯に關する最も精密にして公正なる著作は吾人が屢々引用する Mackail, Life of

William Morris であらう。この書は上下二卷八百頁に近い厖然たる大冊で、最も豐富なる文獻的研究である。この書がモリスに關する最大權威なることはモリス研究家の均しく認める所である。最も普通に讀まれる A. Clutton Brock, William Morris: His Work and Influence は Home University Library 中の一冊であるが、僅々二百數十頁の中に藝術家並に社會主義者としてのモリスの全般を明快なる筆致を以て描寫した便利なる書である。この書は本邦のモリス研究家によつて利用されたこともある。（室伏高信氏、白鳥省吾氏のモリスに關する論文を見よ）次に社會主義者としてのモリスを小冊子の中に書いたものとしては Mrs. Townshend, William Morris and the Ideal of Communism (Biographical Series. No. 2. Fabian Society) と Holbrook Jackson, William Morris, Soialist-craftsman (Social Reformer Series. No. 3) とがある。前者は興味多い筆致を以て、彼が共產主義者となつた經路を明かにし、後者は秩序正しく彼の社會主義的思想を描いてゐる。是等の諸書に加へるのにその藝術を主題とした Aymer Vallance, William Morris, His Art, Writings and Public Life. その文學的方面を主として研究した Alfred Noyes の William Morris を以てしたならば、モリスの全生涯とその事業並に思想とは略ぼ完全に知ることが出來るであらう。尙はこの外、John Spargo, Socialism of William Morris, John Drinkwater, William Morris, a Critical Study. Arthur Compton-Rickett, William Morris, a Study in Personality 等の參考書があるが、今自分の机上には生憎持合せがない。（加田哲二）

內田銀藏著「日本經濟史の研究」

上卷七四〇頁定價七圓五十錢
下卷七九四頁定價七圓八十錢
同文館發行

完全なる日本經濟史の著者として一般より囑目され、遂に果さずして易簀されたる內田博士の遺稿がこゝに改めて刊關に供せられることは、我が學界の爲めに慶賀すべきことなり。殊に日本經濟史の研究を以つて全集最初の二卷となしたることは極めて當を得たりと云ふべし。博士の日本經濟史及び史學に對する造詣の深き他に其の比を見ず、加ふるに考證論述に周到の用意を致されしこと、勿論學者として當然のことなりとは云へ、我等後進の最も學ぶべき點なり。

「大要を學習する上に於ても、單に考證の結果を聞き、討究により到達せられたる結論を知るのみにては、不充分なりと云ふべく、それだけにては得る所淺くして自から物足らぬ所あるを免れざるべし。凡べて歷史的の學科に於て、單に考證の結果、討究の結論のみを述べ少しも之に到達したる所以の手續に說き到らざるは、恰も自然科學の場合に於て毫も實驗を爲さず、又實驗の方法を指示せざるに似たるものあらん。」（上卷六三二頁）故に博士の論斷を下すや極めて嚴密なる考證に基けり。例へば「我國中古の班田收授法及近時まで本邦中所々に存在せし田地定期割替の慣行に就きて」の如きは其の好例なり。斯くの如き用意の下に書かるべき日本經濟史が其の周到を期する博士の自重に依つて終に著れずして止みたるは吾人の最も遺憾とするところなり。僅に未完稿「日本經濟史」と「日本經濟史概要」とを以つて其の一般を推するのみ。

然し乍ら博士の經濟史に對する解釋は必ずしも明確なるものにあらず。即ち「經濟史の目的とする所は、人類發達の歷史に於ける外物使用の方面を研究し、人類は如何に財を理し、生を營み、其の欲望を充足し來りたるかといふ問題を、其の總ての關係に於て考覈論究するにありといふべし。實に厚生利用に關する總ての現象の進化は、即ち經濟史の討究論明すべき題目なりとす。」（下卷四三〇頁）云ふ迄もなく斯くの如きは人間が其の欲望を滿足させんが爲めには財を理することを必要とし、斯く外物資用の必要より生ずる一切の人生活動を汎稱して經濟と云ふに基く。斯くの如き經濟の定義の明確ならざるは敢てこゝに論究する必要あらざるべし。然し乍ら經濟の意義未だ確說なき現在に於いて獨